

阿多羅

第104号
発行
令和6年11月28日
責任者
福島県公立学校
退職校長会安達支部
伊藤末吉

【巻頭言】

改めて、今、考えていること

理事 宮前 貢



私は、昭和十六年（西暦一九四一年）九月十六日生まれ。この私が、本県小学校教員となり、平成十三年（二〇〇一年・二十一世紀）に定年を迎え、十四年三月三十一日に退職した。二十世紀に突入した年の、この日のことは、最後の勤務校に着任したときから強く意識し始め、同時に「二十一世紀は、どんな時代になるか」が、頭から離れない自分への問いになった。

そして、辿り着いた思い、それは、「宇宙の時代」、「地球の時代」、「生命の時代」だ。ソ連が一九五七年十月四日、

世界初の人工衛星・スプートニク、打ち上げに成功して以来、世界各国が宇宙開発を推進した。日本の小宇宙探査機、はやぶさは、小惑星の表面物質を持ち帰る（二〇一〇年六月十三日）離れ業を成し遂げ、世界を驚かせた。「宇宙の時代」到来である。

「地球の時代」。今、地球は、確実に病んでいる。一九七〇年以降、五十年間で、世界各地で頻発している異常気象による暴風雨、洪水、干ばつ、森林火災などは、五倍に増加。さらに、南極・北極圏だけでなく、世界の山岳地帯氷河が解け出し、世界中の海面上昇が進み、バナアツ、フィジー、ソロモン諸島な

どは水没すると言われ、まさに地球の危機である。今、地球に生きる人間一人ひとりの生活のあり方を変えなければならぬ時代だ。

「生命の時代」。これ考えた根っこは、第二次世界大戦以後も絶えない戦争である。パレスチナ、シリア、アフガニスタン、ウクライナ……。そこで多くの人間が犠牲になつている。二十一世紀こそ、人を殺し合う戦争はなくさねばと願うばかりだ。

しかし、今、別の深刻な問題は、異常気象のため、セミが鳴かない、スズメが来ないなど、地球上の動植物、生命ある生物が絶滅の危機に瀕していることだ。今朝（十月三十日）の朝日新聞は、地球上の「四万六千種の生物が絶滅の危機」と伝えていた。地球に生を受けた人間は、万物の霊長と言われている存在だからこそ、私達人間は、生命あるもの全てが生き長らえる道筋と手立てを追い求め、実践する責務があると考ええる。

文部科学省は、「教育は、国家百年の計」と言い続けている。

しかし、今もって、文部科学省が、日本の、いや世界の二十一世紀をどうとらえているかが見えてこない。

平成十四年四月から、学校五日制が完全実施となった。週六日で組んだ時間割を五日でこなそうとするのだから、「五合俵に六合の米を盛る」無理は避けられない、と言われた。

このときを見通して、教科の再編とかを構想し、その具体策を出せなかったことが、そもそもの手遅れで、小学校の英語履修やプログラミング学習のスタートなどは、学校、教師の多忙化の上塗り。教師志願者数激減、教師の高齢化を促進するばかりである。

そして、今思うことは、明治新政府が日本近代国家形成の最大の課題としたのは、国民の教育であった。「学制」は、まさに国家百年の大計の所産であったということ。文部省発行の「学制百年史」によれば、「学制」の起草委員長は、箕作麟祥（みづくりりんしょう）である。一八六七年、フランスに留学し、フランス法制を学んだ、なんと二十二歳の若き俊英であったのである。

【教育随想】



「思いを伝える」

本宮市教育委員会教育長

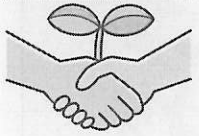
大内 順一

校長職を務めていた期間、自分の思いを伝える機会が意外と少ないこと、そして相手に伝えることの難しさを感じていました。そのような中、校長からの「学校だより」は貴重な媒体であり、私は学校行事等での子どもたちの姿を伝えるだけでなく、自分の思いを伝えることに紙面を割くようになりました。ここでは、実際に学校だよりで取り上げた二つの記事をご紹介しますいただきます。

一生の「宝」～学年末を迎えて～

先日、私が小学1年生の時に担任をしてくれていた恩師からお電話をいただきました。何十年と毎年、年賀状やお手紙をやりとりさせていたのですが、「筆を持つ手に力が入らなくなって文字が書きづらくなったから、せめてお声を聞きたいなあ、と思って・・・」といただいたお電話でした。あの頃と変わらない優しいお声、穏やかな口調。あつという間に、私の心は小学校一年生の当時に帰っていききました。不思議です。

先生に「朝顔の種をそろうと割ってご



らんなきい。」そ

う言われて、中か

らぎゆうつと小さ

くなったふた葉の

赤ちゃんを見つけ

た時の感動。初め

て先生と手をつな

いだ時のぬくもり。あつという間に、いろ

いろなことが蘇ってきます。すべてが、先

生が私の中に蒔いてくれた「幸せの種」で

す。身体が、心が、脳が、「幸せ」をしつ

かり覚えていました。

人との出会いは「一生の宝」。だからこ

そ、心の中で大切に温めていたい。6年生

は、もうすぐ卒業を迎えます。小学校で過

ごした6年間。何人の方との出会いがあつ

たでしょうか。学年クラスの仲間たち、な

かよし班の先輩、後輩。近隣の方々、出前

授業の講師の方々・・・。

今はまだ実感はなくとも、きつとこれは

「一生の宝」に違いありません。我々も、

全校生の子どもたち、保護者の方々との出

会いに今年も心から感謝いたします。そし

て、いつも温かくご理解とご協力ください

ました保護者の皆様に、あらためて感謝い

っぱいの思いです。子どもたちをはじめ、

ご家族の皆様のご健康とご多幸をお祈りし、

この一年の感謝の気持ちに代えさせていた

だきます。本当にありがとうございます。

「生き物の死にざま」という本から

最近読んだ本に「生き物の死にざま（草

思社）」があります。この本は、セミから

象まで29種類の生き物がどのように死んでいくかを書いた短編エッセー集です。

その中で特に心に残ったのが「子に身を捧ぐ生涯・ハサミムシ」のお話です。内容を簡単に紹介させていただきますと思います。

ハサミムシはその名前のとおり、尾の先についた大きなハサミが特徴の虫です。このハサミムシは、子育てをするとても珍しい虫です。卵を産んだ母ハサミムシは、卵にカビが生えないよう40日～80日間飲まず食わずで、卵を守り続けます。やがて卵から小さな子どもたちが生まれてきます。

ハサミムシは肉食ですが、子どもたちは自分で餌を獲ることができません。すると母ハサミムシは、子どもを慈しむように自分の腹の柔らかい部分を子どもたちに与えます。子どもたちは、我先に母ハサミムシの体を貪り食います。母ハサミムシは少しずつ体を失っていきます。しかし、失われた体は、子どもの肉となり血となって命が受け継がれていくのです。遠ざかる意識の中で母ハサミムシは、何を思うのでしょうか。どんな思いで命を終えようとしているのでしょうか。

親や祖父母による虐待で命を落とす子どもたちがいれば、自分の体を子どもにも与え、子どもを命を育てる虫もいます。考えさせられます。



＜ハサミムシ＞

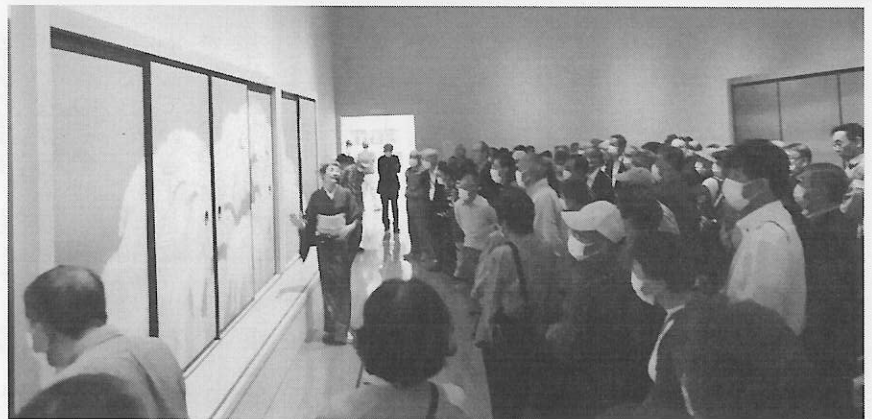
支部第二回研修会 「大山忠作襖絵展観覧会」

十月十七日（木）十時より、二本松市大山忠作美術館において、本支部会員三十名の参加のもと、大山忠作美術館開館十五周年記念特別企画展「大山忠作襖絵展」成田山新勝寺襖絵「日月春秋」をを観覧する第二回研修会を開催しました。

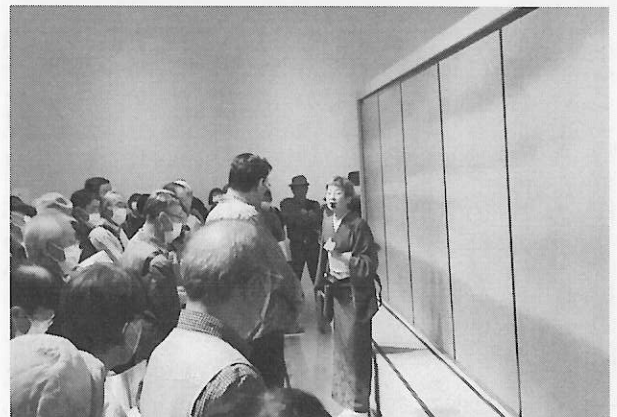
開会式を二本松市市民交流センター一階多目的室にて行い、伊藤末吉支部長の挨拶、高島徹也事務局長からの諸連絡があり、その後、三階にある大山忠作美術館へと向かいました。

美術館入口では、六月の県大会で講師としてお世話になりました大山采子様にお出迎えをいただき、四ヶ月ぶりの再会を喜び合いました。そしてまずは、大山采子様と記念撮影をして、観覧となりました。

展示室に入ると、成田山新勝寺光輪閣客殿「日輪の間」、



「月輪の間」の全二十八面・二十一枚の襖「日月春秋」が視界に広がり、そのインパクトの大きさに圧倒されました。日輪、滝桜（春・三春の滝桜）の前で、大山采子様から襖絵にまつわるエピソードを交えた解説をいただき、大山忠作の襖絵にかけた想いを知

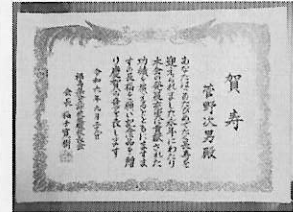


ることができ、参加者一同深い感銘を受けました。その後も、月輪、楓（秋・高湯の楓）の襖絵を観覧し、さらには第二展示室の「成田山と大山忠作」、第二会場（市民ギャラリー）の「大山忠作の足跡」を観覧して美術館をあとにしました。二本松市名誉市民・日本画家大山忠作の世界を堪能した有意義な研修会となりました。

誠に慶賀の至りと心よりお祝い申し上げます

県本部賀寿会員紹介

菅野 次男 様



全退連賀詞会員の紹介

渡邊 貞雄 様



高齢者叙勲受章会員紹介

◇ 瑞宝双光章

渡邊 貞雄 様

(元下太田小学校長)

県文化功労賞受賞

遠藤 徳 様

☆☆心よりご冥福を
お祈り申し上げます☆☆

佐々木 士郎 様

令和六年八月十二日ご逝去
(百歳)

○元須賀川二高校長

会員随想

「奥が深い」野菜作り



天野 茂

退職して七年。母の足腰が弱り、畑仕事ができなくな

なってしまったため、週末に会津の実家に帰って野菜作りをしています。八十〜百坪位の広さの畑が四ヶ所、一人で週末だけ作業する広さを超えています。そのため、一ヶ所は、富良野のようなラベンダー畑をイメージしてラベンダーを挿し木して増やしました。マルチとマルチの間には、防草シートを敷いて除草の手間をかけないようにしました。野菜作りは、ジャガイモから始めました。適当に畝を作り種芋を植えていると、その様子を見ていた近所のベテラン農家が「そんなに畝と畝の間を開けたら草が生えるぞ」「後で土寄せできるように種芋に土を被せんだ」などとアドバイスをしてくれます。ただ芋を植えればよいというものではないのです。その後の

作業の効率を考えるとやる必要があるのです。それから、ジャガイモの後は大根、キュウリ、トマトも植えました。収穫期になると食べきれないほどの量の作物が採れます。ナスやキュウリなどは、採っても採っても次から次へと実がなります。保存がきかない作物は、捨てるしかない場合もあります。もったいないと思いつつも農家の皆さんは作るのです。それから、作物の種類を増やしていきました。当たり前ですが、作物一つ一つに作り方があって、作り方があって、種をまく時期をずらして植えるといい」「ネギは列と列の間を広くしないと土寄せができない」「土寄せするとネギの白い部分が増えるから、三十cmくらい掘ってからネギの苗を植える」など、できるだけ種から育てようとしてきました。ただこれが難しい。なかなか発芽しないのです。特にニンジンとタマネギ。そこでベテランに聞きます。「ニンジンは、水を切らさないこと、梅雨が明けない六月末から七月初めに種をまくといい。葉

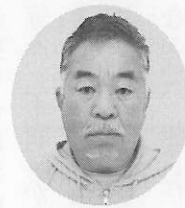
とかを被せておくとおいしいぞ」と教えてくれます。初心者の私にはベテランの言葉は金言です。

野菜作りの大変なことは、雑草です。草刈り機でやるわけもいかず、作物の間や畝と畝の間から生えてくる草を手で一本一本抜き取ります。夏の暑い時の作業はきついです。もう一つの敵が虫です。種をまいて芽が出たそばから虫が食べに来ます。小学校の理科の教材でもあるアオムシは農家にとっては害虫です。週末しか行かない畑で食べられた様子を見るとがっかりします。動物も強敵です。カラスは、スイカをつつき、イノシシは、サツマイモを食べてしまします。殺意さえ生じます。

農作業の楽しさは、手をかければそれに応えてくれる、努力が報われる、何より健康によいことです。まわりの農家の人たちが淡々と作業をしているように見えますが、そこに至るまでの経験とその土地に合った作物の作り方を受け継いできたのだからと考えると「野菜作りの奥の深さ」を感じます。

私のチャレンジ

トライ&エラー



住吉哲也

「未来に向かって生きていく」子どもたち。「過去を振り返りながら生きている」高齢者。前者（子どもたち）と共に夢を抱かせ夢実現のために30数年情熱をもって取り組んできた。そして、現在は後者（高齢者）の人生の先輩たちと共に時間を過ごしている。退職3年後から自宅近くの「サービスタウン」で朝7時から午後3時まで介護福祉士として教員とは全く畑違いの仕事に従事して年末で6年になる。2種類の研修（約30日）を経て、3年間の勤務経歴後、介護福祉士の国家試験にチャレンジし現在に至る。

朝、出勤（歩いて5分）後、各居室をまわって健康観察からはじまり食事配膳、食事介助、病院への送迎（診察付き添い）入浴介助、居室清掃、買い物、排泄介助が主な仕事である。時には今は亡き自分の親と思い、

時には人生の大先輩をリスペクトし出来るだけの満面の笑顔で接している。長く過ごしてきた学校というフィールドから施設というフィールドに変わったが共通点は沢山ある。自分を一番厳しく見ているのは生徒・入居者であるということ。雄弁でも心ない言動は何も響かない。そして、何よりも大切なのは先生・ヘルパーが健康で元気なことである。平均年齢90歳の先輩方から、励まされたりたまにはご指導をいただいたり（怒られたり）して、日々勉強の毎日自身に染みながら過ごしている。ただ大きな違いがひとつだけある。それは、子どもたちとの別れは「巣立ち」という夢がある。高齢者との別れは「死」である。介護福祉士（ヘルパー）は高齢者にとって人生の最後の友になることもある。このことを肝に銘じて、この仕事に誇りをもって今後も取り組んでいきたい。

高校生とグラウンドで2時間汗を流している。

昼は人生の大先輩から夕方は青春真っ只中の高校生から、最高のパワーを分けてもらって自分自身へのチャレンジ（トライ&エラー）を続けさせてもらっている。

会員十年目の近況報告

十年遅れの断捨離



伊藤雅裕

七年ぶりに孫と一緒に二本松提灯祭りと菊人形を見てきました。

油井小学校を退職後、県社会教育施設で二年間、その後、東京の私学で七年間、気が付けば、六十九歳までフルタイムで仕事をすることになってしまいました。

しかし、健康や今後のことを考え、昨年度完全リタイアしました。

その間は、東京に在住しておりましたので、二本松の自宅は、夏休みや冬休みの時だけ自宅の

様子を見に帰宅するだけでした。今年度になりようやく自由な時間があるようになり、七年ぶりに提灯祭りや菊人形を見ることができて、生まれ故郷のよさを孫と一緒に味わうことができました。

両親も亡くなり、子どもたちも東京で生活しているので、二本松の自宅には、だれも住む者がいなくなりました。今後は、先々のことを考え、生活の拠点を子どもたちの近くにおいて生活していく方向で検討しています。

現在は、自宅の整理のため東京の小家と福島の家を行ったり来たりしながら生活しています。油井小学校退職後、植栽は外注で家の中も全く手つかずで足の踏み場もない状態になっていたので、季節のよいときに自宅にもどり、妻と一緒に植栽の手入れをしたり、家の中の不要品の整理をしたり、十年遅れの断捨離をしています。

今のところ妻もなんとか健康を維持できているので、残された時間を大切にしながら健康寿命までは、日々の生活を楽しみながら、家の片付けの方もめどをつけたいと思っています。

新入会員の挨拶

今、思っていること



安齋 憲治

三十五年間の教員生活を終え、現在、二本松市の教育支援センター指導員として週四日勤務しています。

退職するまでの数年間は、退職後の夢のような生活を思い描いていましたが、実際に退職してみると重い責任感から解放され、ほっとしているのは事実ですが、何か時代から取り残されたような静寂感も感じています。現役時代を振り返りますと、自分の指導が正しかったのか、一人一人の子どもたちに適切な対応をしてきたのか、同僚には迷惑をかけていなかったのか等々、不安ばかりが頭に浮かびます。ただ、当時の自分が最善だと思って取り組んできたことなので、無責任ながらご容赦願いたいと思うばかりです。まだ、教育界に関わりのある職責の中で感じていることは、

多様性という便利な言葉の範疇の中で、届けたくても届けられない支援を待っている子どもたちがたくさんいることに気づかされていることです。具体的には、子どもの意思を尊重するあまり保護者と学校との指導方針にずれが生じてしまうこと、学校や社会のルールを家庭の事情で解釈を変えてしまうこと、子どもたちのわがままを個人の意思であると誤解してしまうことなど枚挙にいとまがありません。子どもの特性に関わる多様性、教師の指導の多様性、保護者の考え方の多様性、それぞれの想いを尊重する中でどれだけ子どもたちに寄り添えるかが大きな課題です。何がその子にとって必要な支援なのかといった本質の部分を様々なしがらみを捨てて、学校、地域、家庭が同一歩調で取り組むことが大切だと感じています。子どもたちに関わる大人が正しい多様性の認識をもつべきかもしれません。一人でも多くの子どもたちが楽しい学校生活を送ることができるとを願ってやみません。

教職を振り返って



大内 剛

この度、退職校長会安達支部に入会させていただきます。よろしくお願ひいたします。

これまで三十八年間、学校現場及び教育行政機関に勤め役職定年を迎えました。

振り返ってみますと、特に三つのことが印象に残っています。一つ目（教諭）は、県内の小学校体育の準備運動の中で行われている「運動身体づくりプログラム」の作成に携われたことです。いわばボトムアップで体力低下の現状に何らかの対応をしようというところで十八年前にチームが組織されました。しかし、まるで0からのスタートであったため苦労の連続でした。福島大学の先生方のご指導を受けながらプログラム及びDVDを作成し、県内の各校に配付できた時の喜びは今でも忘れることができません。今も「動ける体・動きたくなる体」づくり

役立っていることをうれしく思います。

二つ目（教頭）は、震災直後に校長・幼稚園長職務代理者を四か月務めたことです。目に見えない放射線や、浪江町から避難している児童への対応など、苦労の連続でしたが、教育委員会や近隣の校長先生方の指導助言のもと何とか乗り切ることができました。

三つ目（校長）は、子ども・保護者・地域住民・教職員との信頼関係を築き、変化の激しい社会を「生き抜く力」を子どもたちに身に付けさせることに力を入れてきたことです。

「学校は、なりたい自分になるために貯金をするところ（貯金をするように力を蓄えていくところ）」を基本として、子どもたちに「自信」を付けさせるべく校長として教育活動を創意工夫させてきました。

子どもたちと直接向き合う学校からは離れましたが、これまでの経験を生かし、今後も教育現場や地域社会に少しでも貢献できればと考えています。